

「HPS 養成教育プロジェクト」の講習を実施して

さる3月24日に、Hospital Play Specialist 養成教育プロジェクトの第1期受講生の修了式が無事終わり、準備に当たってきたスタッフは一同にほっとしている。本事業は、離職している保育士と看護師に対し、Hospital Play の学びを提供し、Hospital Play Specialist として小児医療の更なる向上に寄与するという目的を持っておこなわれている。そのためか、受講生はみな非常に熱心で、英国から招聘した HPS2 名も含め、多くの講師がその受講態度のまじめさに感心していた。受講生にもプロジェクトに対するアンケートをおこなったところ、この講習がとてもインパクトの強いものであったことが良く分かる結果が現れている。ある受講生は「これまでずっと働いてきたので、少しペースを落としたいこうと思っていたのですが、この講習を受けて再び小児医療の現場に復帰する力が湧いてきました。」と記述しており、まさに学びなおしの目的が達成されたととてもうれしくなった。これまでの準備の苦勞が一気に吹き飛んだ感想であった。

もちろん、今後解決しないといけない課題も多く見つかった。HPS はその名称どおり、Hospital Play を通して病児の治療体験を支援する専門職である。そのため、小児医療をおこなう医療機関との協力関係が必要不可欠である。医療機関と良い関係を結び発展させていくことが、今後とても重要である。二つ目は、広報活動の強化である。本学の「学びなおし GP」の評価委員会においても指摘されたことだが、新しい職種なので広報を十分におこなうことが大切であり、効果的な広報のあり方が今後の課題である。三つめは、この事業を裏付ける研究活動の重要性である。「なぜ HPS が、病院で治療を受ける子どもたちの支援になるのか」この課題に応えない限り、本事業が成功したとは言えないことを痛感している。(英国で生まれた HPS を日本の文化や医療体制の中にどうやって組み込んでいくのか、これは非常に大きな研究テーマである。)

このように、離職者を再び社会の中へと送り込んでいく学びなおしの事業は、単に新しい知識や技術を与えるだけではなく、受講生をエンパワーする要素や、社会的に認知される土壌を作ることなど、多角的な取り組みが要求されるということが分かった。そのため何よりも、プロジェクトを運営する者のモチベーションを高めることが大切であり、また事務も含め大学全体の具体的な協力が必要である。文部科学省が、履修証明書の発行を認めたことは、私たちのプロジェクトのように大学が独自に何か新しい専門職の養成を行う場合に、社会的な認知を高める一つの要素になると考える。

これからまだ四期の講習が残っている学びなおし GP 事業だが、すべてが終了した暁には、本短大にとってはもちろんのこと、日本の小児医療に対してもすばらしい財産が残っていることを目指して、さらに努力していきたい。

GP 担当者 松平千佳